

『慶長五年の関ヶ原』



監修 静岡大学名誉教授

小和田 哲男

鳥瞰図 板垣 真誠

資料作成 小和田塾生

発行 関ヶ原町 地域振興課

■町長　淺井健太郎挨拶

積年の夢であった鳥瞰図の完成、今はただひたすら小和田先生を初め、関係者の皆様方のご苦労に感謝の気持ちで一杯です。

天下分け目の関ヶ原の戦い、日本人なら知らぬ人がいないぐらいの重さをもった史実です。歴史学者や小説家などこの史実については数多の人が語っていますが、その表舞台に登場するのは、きまって東西に分かれて戦った支配階級の武将たちです。描かれる世界は功をもとめての権謀術数、仁・義・礼・智・信等の徳目、文官派と武闘派との憎しみや妬みなど、視点は実に多様です。しかし、実際に国を支えていた農民や商人達のことは描かれたものはほとんど存在しません。そこに慶長五年（1600年）当時、関ヶ原町のたたずまいがどうであったか、それを鳥瞰図で表したいという、私の秘めた思いがあります。またそのこと事態が関ヶ原合戦という偉大な史実を守り、かつ後世に伝えていくという歴史的使命を果たすことにもなると考えています。夜郎自大的な考えで恐縮ですが、この鳥瞰図の作成によって関ヶ原合戦など幾多の戦いにおいて一番の被害を被った無辜の農民などへの視点が広がればと願っています。

■監修　小和田哲男

関ヶ原の戦いが語られる時、東西合わせて約16万の軍勢が何もない関ヶ原という原野でぶつかりあったと思われがちである。しかし、そこには、人家もあり寺や社もあり、何より住民たちが汗水たらして育てた水田が展開していた。

「慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦いがあった時、関ヶ原周辺はどのような状況だったのだろうか」という素朴な疑問からこのプロジェクトははじまった。関ヶ原町には幸いなことに、明治時代に作成された地籍図が残っており、また慶長5年に近い時代の検地帳もかなり残っていた。

これらを素材として、「道はどうなっていたか」「川はどう流れていたか」などと、関ヶ原小和田塾に集まったメンバーで討議をくりかえし、田畠の分布に至るまで復原を行い、原図を作成し、それを鳥瞰図に仕上げることができた。関ヶ原の戦いが関ヶ原周辺に住んでいた人々にとって何であったかを考えるきっかけになれば幸いである。

■小和田哲男先生プロフィール■

1944年生まれ。静岡大学名誉教授。文学博士、歴史学者であり、特に日本の戦国時代に関する研究で知られている。主な著書に『戦国武将』、『戦国の参謀たち』『関ヶ原の戦い　勝者・敗者の研究』など多数。

■画家　板垣真誠プロフィール■

1958年生まれ。歴史物を中心に活躍中。特に戦国時代の合戦や、城の復元に定評がある。代表作『歴史群像シリーズ』、『戦国の城』、『よみがえる名城シリーズ』など多数。

はじめに

関ヶ原合戦は、東軍率いる徳川家康と西軍の総司令官ともいべき石田三成の軍がこの地で激突した。古文献などには、武将等の活躍する場面ばかりで、村民の様子に関する記載がほとんどない。『関ヶ原合戦図屏風』なども野原での戦況が描かれている。このように、戦場はまるで無人の原野であったと誤解されがちだが、そこには村人のくらしがあり、どれだけ両軍の兵により踏み荒らされ被害を被った事か、各村の検地帳をもとに屋敷・田・畠等を地図上に書き込んだ「原図」と『鳥瞰図』を後世に伝えようと考えた。

そこで、『関ヶ原小和田塾』を開講し、小和田名誉教授の指導により、合戦当時の各村を再現することとなった。

小和田塾名簿

		氏名	担当地区
塾長		小和田 哲男	
顧問		高木 清士	
〃		坂東 紀喜	
塾生	1班	松井 長政	今須
〃		西村 完市	〃
〃		三和 敏郎	〃
〃		川崎 敏彦	山中
〃	2班	三輪 好典	藤下
〃		高木 弘子	松尾
〃		松井 侑子	〃
〃		山根 とも子	関ヶ原
〃	3班	池側 誠	〃
〃		水向 都	〃
〃		日比 幸	〃
〃		柏 憲明	大高・東町
〃	4班	河本 章善	〃
〃		池田 ひさ子	野上
〃		岩田 やよい	〃
〃		曾我 治太郎	小池・小閑・玉
〃	5班	不破 剛	〃
〃		澁谷 節子	〃
〃		加納 孝子	〃

今須（居益・今洲）村

慶長五(1600)年当時の資料がないため、慶長十四(1609)年「居益村御縄打惣寄帳」をもとに屋敷数を推定した。延宝二(1674)年「今須村検地帳」により、田・畠・屋敷を確定し、上記惣寄帳と面積を比較し、地図上に記入した。

山中村

慶長十四年「山中村御縄打水帳」により、田・畠の位置を確定し、屋敷については、慶長十四年「山中村御縄打屋敷」による。明治二十一(1888)年「不破郡山中村字絵図」、昭和十五(1940)年「不破郡関ヶ原町土地實典」などを参考資料とした。

藤下村（すりはり峠村）

寛永元(1624)年「藤下村御検地帳」、享保七(1722)年「藤下村田畠名寄帳」により、田・畠・屋敷の位置を確定した。明治二十一年「大字藤下字図」、昭和十五年「不破郡関ヶ原町土地實典」などを参考資料とした。

松尾村（大関村）

承応四(1655)年「松尾村検地帳」をもとに、田・畠・屋敷の位置を確定した。その他、明治六(1873)年「不破郡松尾村地券取調總絵図」、明治二十一年「不破郡松尾村字絵図」、昭和十五年「不破郡関ヶ原町土地實典」などを参考資料とした。

関原村（小池・小関・東町を含む）

慶長二(1597)年「関原村検地帳」をもとに、田・畠・屋敷の位置を確定した。明治二十一年「不破郡関ヶ原村字絵図」、昭和十五年「不破郡関ヶ原町土地實典」などを参考資料とした。

大高（尾高）：伊吹村の支村

慶長五年当時の資料がないため、寛政年間(1789～1801)「濃州徇行記」をもとに、田・畠・屋敷を推定した。面積については、昭和三十一(1956)年「不破郡関ヶ原町土地實典」の面積と比較し、地図上に記入した。明治二十一年「大高土地台帳」を参考資料とした。

野上村

寛文十(1670)年「野上村検地帳」をもとに、田・畠・屋敷の位置を確定し、屋敷数については、七十年後の資料であるため調整した。明治二十一年「不破郡野上村字絵図」、昭和十五年「不破郡関ヶ原町土地實典」などを参考資料とした。

玉村

慶長五年当時の資料がないため、正保二(1645)年「美濃国郷帳」と明治七(1874)年「不破郡玉村字切絵図」（奥田和子氏所蔵）の田・畠の面積を比較し、地図上に記入した。屋敷数については、上記郷帳より推定した。

屋敷については、各村共に「中山道分間延絵図」を参考とした。

地図は縮尺 2500 : 1 を使用し、神社・寺・道・山・川・荒地等を記入した。

<裏面へ続く>

慶長五(1600)年九月十五日、関ヶ原の決戦時、稲は刈り取る前か後か?

決戦は、新暦十月二十一日頃で、稲刈りと同じ時季となる。八月九日石田三成が挙兵し、関ヶ原を通り大垣へと進軍。九月三日には大谷吉継らの諸隊が山中、藤下村に陣を置くなど、大戦が始まる緊迫した情勢の中、戦場となる前に青田刈りを行ったと推定する。

又、十月十九日（合戦後）道中奉行間宮彦次郎は、「関ヶ原の百姓が山奥に隠れているので、安心して出て来て麦作をすすめた」町所蔵文書より。稲を刈つた後でないと、麦作ができないことからも、すでに稲は刈り取った後と考える。

屋根形式

入母屋造りは、京都を中心とする近畿地方に多く、その影響を受け、関ヶ原も同形式であった。この時代、自給自足が原則で、屋根の材料は、身近で調達できる藁・茅葺きであったと考える。家を造る作業は、村人が協力し合い普請したため、同じような屋根・外観となったのであろう。「滅びゆく民家」

屋敷

一般に屋敷の面積に対し、家屋はその5割～7割である。地図上に描くと米粒大となり、何が描いているかわからなくなるため、屋敷=家屋の面積とした。

茶畑（松尾村）

この時代、自給自足の生活で食べるのがやっとの農民が多い中、茶畑を作る余裕のある者、すなわち、田・畑を多く耕作する高持農民の畑を茶畑と推定した。

検地

太閻検地は6尺3寸を1間とし、慶安二(1649)年の検地条目以降は6尺を1間とするのが一般的であった。「図録農民生活史事典」

この調査では1間を6尺とした。

(文 高木 清士)

『慶長五年の関ヶ原』

